

台湾総督府旧蔵日本関係典籍の概要

宮崎 修多

成城大学

1 調査概要

昨秋、10月30日午後より11月2日まで、台北市にある国立中央図書館台湾分館の和漢書調査（第4回）に参加した。実質的に閲覧できたのは、間に休館日（31日）を挟んで正味2日半、台風と豪雨に見舞われながらの調査であったが、概ね雰囲気だけは把握できたと思う。以下はその概要、というより私見をまじえた印象である。

作業手順としては、図書館発行の現行目録『線装書目録』（1991年刊）著録の総6405点から、配架番号の表記によって台湾総督府旧蔵書とおぼしきもの2000余点を抽出した目録をあらかじめ作製し、それをもとに目についた項目から出納した。『目録』における請求番号の頭に（和）とあるものがそれらであり、「凡例」にはそれらの「日拠時期台湾総督府図書館」の蔵書である旨が記されるからである。カードに書誌を採り、デジタルカメラないし35ミリフィルムカメラで表紙巻末尾等を撮影し、その画像を書誌カードと目録とに接続させた形でデータ化するという方法をとった。抽出項目総数2064点の書籍を、すべて請求することは時間的にとうてい無理であったが、第1～3回調査（宮崎不参加）とあわせて約400点のサンプリングによって得られた所見を報告しておきたい。

原物および目録から類推した内容の大雑把な内訳は次の通りである（但しこれは今後の調査により修正されなければならない）。

内訳（概数）

総記（書誌・叢書・雑著）	1 0 0 余点
儒学・世俗教訓	5 0 余点
仏教	8 0 余点
神道	7 点
易学	8 点
本草・物産・農書	約 1 2 0 点
故実・風俗	約 6 0 点

法制	30余点
兵器・軍事	30余点
中国歴史	70余点
中国地誌	280余点
台湾関係	約260点
紀行・遊記	約80点
日本史（朝鮮含む）・雑史	130余点
人物伝・叢伝	50余点
言語・文典	40余点
漢詩文	約140点
小説	25点
国文（和学・韻文他）	約180点
書画・音楽・諸芸	約300点

2 線装和漢書の伝来

台湾総督府の集書は、おそらく明治28年6月の総督府設置から日をおかず、7月には各地に教育機関が設けられはじめて以来のことであろう。しかし図書館設置の下命は大正3年、実際の開館は翌4年と、総督府設置よりかなり後であり、かなり短期間に蔵書を充実させねばならなかった事情（後掲〈略史〉参照）、総督府の政治面に貢献すべく集められた図書も混じってはいるが、あくまで児童書にも力点を置いた一般公開図書館であったことをまずは銘記しておくべきであろう。その点で調査の進んだ台北帝国大学旧蔵図書の集書傾向とは、性格的に全く別種なのである。

総督府の実務にかかわる文書については、中京大学社会科学研究所の尽力と台湾省文献委員会の協力によって、戦禍をくぐりぬけて保存された文献委員会所蔵の文書が公開されつつある。とくに文書細目ともいべき膨大な「永久保存公文類纂」が明治28年から35年の分まで翻刻されて見やすくなった（『台湾総督府文書目録』第1巻（1993年）～現在第9巻（2001年）まで刊行中、ゆまに書房）。

今回調査の対象としたのはそれとは別の、公開図書館として総督府図書館が蔵してきた書籍類である。昭和20年5月の空襲によって疎開させられなかった分の多く（特に児童書、巡回書庫分図書、新聞雑誌の一部）が灰燼に帰したという、戦時を知る元図書館司書高碧烈氏の証言を得たが、一般の閲覧に供されてきた洋装本の多くも罹災したとすれば、今回調査した線装本は辛うじて戦火をまぬかれた疎開本とみてよい。

結果から先にいえば、これら線装本は、総督府図書館蔵の和装本がほぼそのまま残存したものである。一証例をあげる。現存書のなかでも多くの分量を占める中国地誌の類でいえば、総督府図書館の編になる『台湾総督府図書館所蔵支那地方志目録—昭和十三年末現在』（昭和14年1月刊）には148点の府志・県志の類が地方別に列挙されており、上にあげた現存

書280余点はそれをほぼすべて取り込むかたちで残る。旧に倍した現存書点数は、その後の購入・寄贈書も多く含まれるがゆえの加増であり、少なくとも昭和13年における書物群が散逸した形跡はないのである。もう一例、台湾関係書もそうである。この類に関しては、大正15年6月に刊行された『台湾総督府図書館和漢図書分類目録—台湾之部』にあたってみる必要があるが、これが大正14年末現在の目録であることを考慮して、現存書と比較しても、この大正目録に包含される以上のものが確認できた。この二点から類推して、線装本に限っていえば、ほとんど散逸・被害をまぬかれているとあってよいであろう。今後はさらに原物と旧目録（後掲<旧目録>リスト参照）との詳細な照合が望まれるところである。

ただし漢籍が現時点において少ないと思われるのは、本来の姿なのか、なにがしか散逸の結果なのか、今後再調査する必要がある。あるいは（和）の記号のないものに総督府旧蔵書が混入してはいないか。漢籍は戦前戦後を問わず利用度の多かったことが想像されるが、戦後よく利用に供されたために一般書扱いされ、いつしか総督府旧蔵であることが忘れられ新しい番号が付されることはなかったか。この確認のためにも、やはり原物と旧目録との突き合せが必要であり、今後に俟つべきであろう。

現況は残念ながら当地の気候風土のせいか、虫損水損甚だしいものが多いが、近年施された裏打ち作業によって繕読しやすくなっている。その技術には多少疑問もないわけではないが、板状になって開けなくなるよりよほどよいといわねばならない。

3 台湾関係書

かつて図書館が目録を個別に作ったように、中国地誌は一通り揃っているが、なんといても本図書館のもっとも特色をなすのは、台湾関係の地誌である。これらが台湾研究において屈指の貴重な資料群であることは、現地でも夙に知られており、漢文で書かれたものは1960年代から70年代にかけて台湾銀行経済研究室から陸續と翻刻刊行された「台湾文献叢刊」の底本になっているものも多く、それらの内容も『台湾文献叢刊提要』（民国66年刊）に手際よくまとめられており、ここに喋々するまでもない。和文のものでも臨時台湾政府調査局の報告書『旧雲林県制度考』稿本1冊などあり、今後の台湾研究に資するであろう。ここでは地誌以外のものを2、3挙げておく。

『台湾俗曲集』と仮に題された、多くの小冊子を3冊に合綴した歌謡集が、総督府の集書として残っており、近年、台湾歌謡研究の王順隆氏も使った資料である。これら台湾の俗謡に関しては、つとに大正13年刊行、片岡巖（台南地方法院検察局通訳）著『台湾風俗誌』に採り上げられている（第4集第2章「台湾の雑念（サブリアム）」）。雑念は土語歌と北管楽（支那北方の音楽+北京語歌詞）の混淆した歌謡である（王順隆氏はこれらの歌謡を「歌仔」と称して多く福建や廈門から出てきたものとされているが、清末にはまだその名称はなくここでは片岡氏に従って「雑念」としておく）。ここに収められたのは清朝末期の刷物25点だが、単なる民謡ではなく、ここでは社会風刺、政治批判、教訓をのせるものに振幅を増している。木版で平均3～4丁の仮綴じ本は日本の中本型に近く、また江戸末期に多く出された、「しん

いうのは、どういうことであろうか。

紀行文の類は、土地柄を反映してか南島関係の漂流記ものが多い。『広東漂流記』『広東漂流覚書』『広東物語』『巴坦島漂流記』『阿南漂流記』『南瓢記』（安南）『紀日高蘭浦漂人異話』『船中日記』（安政4年伊達信夫郡の御城米船が清国通州に漂着した時の日記）『渡唐草』『漂客潭記』その他かなりの数のものが、昭和4年に集中して東北帝国大学蔵本、すなわち狩野文庫本を影写して集められている（一部宮城県図書館）。これらは個人の収集品がたまたま一括して納入されたというよりも、容易に原本を借り出せない台湾にあって、本土で備書をたのんで筆写本を作り、それらをまとめて買い取るかたちで納本されたものと思われるがいかか。もとよりこれは受け入れ印の年記が筆写識語に見える時期からそう隔たっていないことからの想像である。

本草関係では、『坂本浩然菌譜』4冊、編者不明の『草木図』4冊、同じく『菊写生』1冊、『虫写生』1冊、いずれも彩色写本。版本では飯島文常画『菊譜』（天保2序）。また動物では堀田正衡著『観文獸譜』2冊、『和漢諸鳥口伝聞書』1冊も比較的良質な写本のごとくである。また漢詩人鷹取岳陽の寄贈（大正5年）になる『蘭学階梯』刊本2冊（天明8）は、「文政辛巳浜松三畏斎文庫」の蔵書印から、水野忠邦旧蔵なることが分かる。

和学関係で注目すべきものとしては、大日本歌書綜覧に書名があるものの、中身の知れなかった『未底記』がある。これは元禄期の幕臣歌人鈴木重規の和歌聞書で、元禄元年、烏丸光雄と清水谷実業両卿に和歌師範の勅許がくだり、おりしも在京し烏丸家に入門した重規が光雄とかわした問答がその内容を占めている。ただし概書は抄出本らしく、元本は屋代弘賢が享和2年10月に買ったものであったが、それを盛規なる人物が「あるやむことなきかた」より見せられ、抄写したむね、盛規の安政5年の識語にみえる。国内で屋代本の所在をつきとめることは可能であろうが、さしあたっておよその内容を把握するよすがとなるだろう。和歌連歌雑記では他に『常亭漫録』なる著者不明の写本1冊があった。

狂歌本では、『万載狂歌集』（天明3刊、栗田武氏寄贈）をはじめとして、『狂歌東西集』（寛政5刊か、山中共古旧蔵）『狂歌東來集』（寛政13刊）『狂歌武者志風流』（文化元刊）『狂歌新草集』（文化10刊）『狂詠都名物集』（文政12刊）『狂歌里山海』（文政13刊、大坂蝙蝠連）『狂歌春の光』（刊年未詳）『狂歌八題集』（刊年未詳）など。

俳書では、『芭蕉庵三日月日記』（写本）『露沾公七回忌集』（元文4刊、五重軒露月ら編）『〔安永八年点取俳諧〕』（写本）『七柏集』（天明元刊、蓼太編）『蘿葉集』（天明2刊）『春興朝日河』（享和4、備前岡山）『ふるたゝみ』（文化2序、桃衛庵馬一、桃隣追善か）『大鶴庵塊翁月次丁摺』（文政12序刊）『桃家春帖』（天保2刊）『今人附合集』（天保11刊、禾木園編）『今人発句集』（同上）『春興七福集』（慶応2）『還之曠』（年代未詳、北越水交亭社中、京都版）などが目についた。ここには一定の集書態度が窺えるわけではないが、こうした中興期から化政・天保俳書は、案外国内の公共図書館でも容易に見られず、『国書総目録』等でも1～2の伝本登載のみのものも多く、俗にいえばなかなか渋いコレクションといってよい。このことは総督府図書館が児童をふくめた一般の市民図書館であったことといささか矛盾するようであるが、戦前にはこうした一般むけの公共図書館でも、個人の寄贈寄託による専門的

収集が一般書の中に内包されることが少なくなかったのではなからうか。

音楽書では謡曲関係が多いのは当時の通例でもあろうが、幕末の俗曲関係の比較的多く蔵する理由を思い付かない。絵入りの『常磐津富本清元入どゝ一』（柳亭真似彦撰、一好斎酒盛画）や、『端うたのふき分』『端唄糸廻綾初編』『端唄稽古三味線』など多く、その他歌沢のものもいくつかあり、こうした小曲のものはやはり一般にも需要があったということか。

その他、林子平『海国兵談』のかなり筋のよい写本が二種。また唐船持渡書の資料として代表的な、天保12年から安政2年までの『書籍元帳』写本13冊もある。これは大庭脩著『江戸時代における唐船持渡書の研究』（昭和42刊）に翻刻、解題がそなわる長崎県立図書館本と同内容であるが、原本と思われる長崎本で、落札書の各条に捺してある「書籍買請人」の小判型墨印がここにも実捺されており、これは長崎會書あるいは奉行所で副本を作っていた証左か。ただし大庭氏著書に写真掲載された印影と多少異なるように見えるのは、この印も数種あったということであろうか。

叢書を納入して蔵書を充実させるのは後発図書館の一手段であるが、ここでもそれが窺える。漢籍としては明治42年に昌平校官版を補刻再刷した昌平叢書が、いくつかの欠本はあるもののよく揃っている（すべて「後藤文庫」印あり、昭和14年8月に台湾婦人慈善会から寄贈）。昌平叢書には明治42年版と、京都山田聖華房から松沢老泉著『彙刻書目外集』6冊を加えて刊行された大正6年版とがあるが、『彙刻書目外集』の見えない所からして、ここにあるのは明治版であろう。漢籍の和刻本が比較的少ないのは、大陸あたりで購入したと思われる『欽定古今圖書集成』1586冊、『皇清經解』2種（咸豊11年刊140冊、光緒14年刊158冊）といった大部な唐本の叢書があったからかもしれない。必ずしも訓点付の和刻本が要請される土地柄ではなかったという事情もあろう。また日本古典籍では、それらの多い成篋堂叢書、故実叢書もほぼ揃っている。絵画では、石川豊信の『絵本はなのみどり』（宝暦13刊）など江戸出来の絵本もいくつかあるものの、他の多くは久保田米斎らの図画刊行会叢書本や大村西崖らの図本叢刊本でまかなってある。またこれは叢書ではないが、近世の絵本類を明治20～30年代に求版して多く刷出した大阪青木嵩山堂の刊行書が多く見られた。こうした集書態度も、大正～昭和初期に急いで図書館として体をなさなくてはならなかった条件と考えあわせてみれば興味深い。

5 蔵書印と集書傾向

そうした書物群がいかにして集められていったかを垣間見るには、総督府図書館の納入の基本台帳が見当たらず限り、寄贈印や蔵書印をみるのがよい。ごく頻繁に見うけられたものを列挙しておくのと次のごとくである。

印記の例 * [] 内は墨書記入

○図書館蔵印

- 「台湾／文庫／図書」（朱文方）
 「台湾総／督府図／書館蔵」（朱文方）
 「台湾／総督府／図書」（朱文方）
 「台湾／総督府／図書館蔵」（朱文長方）
 「台湾省立台北／図書館蔵書」（朱文長方角円）＊現在のもの

○寄贈印

- 「御慶事／記念図書」（朱文長方）
 「御慶事記念／図書／寄贈者／〔菊地角太郎〕」
 「大正三年十二月二十六日／東洋協会台湾支部ヨリ寄贈」（朱文長方）
 「大正〔四〕年〔十二〕月〔九〕日／東洋協会台湾支部ヨリ寄贈」（朱文長方）
 「大正五年五月一日／淡水会代表者柳生一義ヨリ寄贈」（朱文長方）
 「大正六年二月十九日台／湾総督府民政部ヨリ保管転換」（朱文長方）
 「大正〔六〕年〔十一〕月〔 〕日／〔博物館〕ヨリ寄贈」（朱文長方）
 「大正七年八月一日総代／守屋善兵衛寄贈台湾縦／貫鉄道全通式記念図書」（朱文長方）
 「守屋善兵／衛氏在台／記念寄附」（朱文方）
 「大正〔十五〕年〔一〕月〔七〕日／〔稲垣孫兵衛氏〕ヨリ寄贈」（朱文長方）
 「昭和〔七〕年〔七〕月〔十一〕日／〔岩切源次氏〕ヨリ寄贈」（朱文長方）
 「昭和十四年八月一日／台湾婦人慈善会ヨリ寄贈」（朱文長方）
 「台湾有志者／音楽会寄贈」

○個人蔵書印

- 「後藤文庫」（朱文長方）
 「内田文庫」（朱文長方子持粹）
 「小林／諄恭／図書」「諄恭之印」（朱文方）
 「野艸／庵一水」（朱文有界長方）

その他多数

最初の印にみえる「台湾文庫」こそは、総督府図書館の原型ではなかったか。たとえばたまに見られる寄贈者による次のような識語はそれを傍証することになるか。

恭聞皇太子殿下以明治三十三年五月十日举行大婚之典茲以斯書贈呈台湾文庫以永為大典之紀念云爾

これは光緒13年刊本『関聖帝君明聖真経』の裏表紙見返しにみられる墨書であるが、皇太子すなわち後の大正天皇の成婚式を記念しての寄贈図書はこれ以外にもいくつかある（「御慶事記念図書」印もこの時のものと思われる）。大正3年の図書館成立前の書き入れは、その国事に関わることからしても、既に「台湾文庫」なる一連の図書が纏まって存在し、かつ総督府と密接な関係をもっていたことが察知されるのである。おそらくは総督府付図書の総称と

して通っていたのがこの「台湾文庫」なる名称であり、これらを基礎に形成されたのが総督府図書館であったとみてよいであろう。

既に大正4年8月の開館以前に、東洋協会台湾支部から相当数の寄贈があったことは注目されるが、開館後も多くの政府外郭団体や個人からの寄贈で集書されたことが、これら寄贈印類から推定できる。特に大正5年には栗田武（総督府勤務か）、台湾在住の漢詩人鷹取田一郎（号岳陽）ら個人からの寄贈が相次いでいる。淡水会代表の柳生一義は、当時台湾銀行の頭取であり、明治32年の創業から副頭取として活躍した台湾財界の実力者であった。守屋善兵衛は台湾日日新報社の社主で、これも政治文化両面に影響力を持っていた人物であることはいうまでもない。

個人蔵書印は、たまたま購入ないし寄贈されたものに捺されていた場合もあるので、あまり集書の実態を物語るものとはいえないが、かなり多く見られる「後藤文庫」や「内田文庫」印などは、総督府とながしかの関係を暗示しているように思える。「後藤文庫」が明治31年総督府民政局長となった後藤新平のものであるならば、旧職員も集書に直接間接に寄与していることになるが、今のところ確認できない。ただ「内田文庫」印が明治43年から民政長官、また大正12年から台湾総督を務めた内田嘉吉のものであることは、この印のある書物に「前民政長官内田嘉吉氏」と刷込まれた肖像写真が蔵書票のごとくに貼付されていることによって知られる（写真貼付のもの寄贈は大正9年で、大正4年に民政長官辞職後、内地にいる時にあたる。別に写真の貼っていない大正元年寄贈本もあって、在職中から寄贈していたことがわかる）。「内田文庫」印は『倭名類聚抄』（寛文7年版）や『妙術博物筌』『観文獸譜』など多くにみられた。

さて俳書や狂歌本といった江戸俗文芸の目ぼしいもの殆どすべてに押捺されるのが「野艸庵一水」印である。慶安3年刊の仮名草子『心学五倫書』などにもある。自身でも俳諧をよくした人物らしく、ここに蔵される『蝸亭句集』稿本1冊はこの人の詠であろう。明治30年代に日本国内で入手したものが多く（本人識語による）、文芸に相当目のきく人物だったと思われるが、惜しむらくは素性がはっきりしない。この人物のコレクションが纏まって購入されたのか、本人が台湾関係者でもあって寄贈されたものかも定かでなく、清教をまつ。

<旧目録> 刊行順

- ・台湾総督府図書館和漢図書分類目録—大正六年末現在（大正7刊）
- ・台湾総督府図書館増加和漢図書分類目録—教育・文学語学之部
大正七年～十一年末増加分（大正13刊）
- ・台湾総督府図書館増加和漢図書分類目録—歴史地誌・法制経済社会統計植民之部
大正七年～十二年末増加分（大正13刊）
- ・台湾総督府図書館和漢図書分類目録—台湾之部—大正十四年末現在（大正15刊）
- ・台湾総督府図書館増加和漢図書分類目録—総類・哲学之部

大正七年～昭和元年末増加分（昭和2刊）

- ・台湾総督府図書館増加和漢図書分類目録—芸術・産業・家政之部

大正七年～昭和二年三月増加分（昭和3刊）

- ・台湾総督府図書館増加和漢図書分類目録—理学・医学・工学・兵事之部

大正七年～昭和三年三月増加分（昭和4刊）

- ・台湾総督府図書館和漢図書分類目録—000総類 —昭和十年末現在（昭和12刊）

*ただし070台湾之部と080児童用図書は除く

- ・台湾総督府図書館所蔵 支那地方志目録—昭和十三年末現在（昭和14刊）

- ・台湾総督府図書館和漢図書分類目録—100哲学・宗教 200教育

—昭和十年末現在（昭和15刊）

<図書館略史>

大3・4・14 台湾総督府図書館官制公布（勅令第62号）

8・6 隈本繁吉（総督府視学官）図書館長を命ぜらる。

9・12 太田為三郎（元帝国図書館司書）図書館事務を囑託さる。

大4・8・9 開館

大5・5・16 太田為三郎図書館長を命ぜらる。

7・1 児童閲覧室開設（定員130人）

大7・8・16 明石総督巡視

大8・9・1 普通閲覧室増設（定員130人に）

大10・7・8 太田館長依願免官、並河直広（石川県立図書館長）着任。

大11・4・1 閲覧室増設（166人）

8・21 館外閲覧事務開始 9・22 第1回巡回書庫を22箇所へ発送。

大12・10・23 第1回図書館講習会（以後毎年開催）

11・5 内田総督巡視

大13・2・9 閲覧室増設 10・14～12・1 書庫拡張工事

大14・6・17～19 始政三十年開館十年記念として展覧会・講演・お伽話・狂言上演などを挙行。

昭2・7・9 並河館長死去、若槻道隆（視学官）が館長事務取扱となる。

8・30 山中樵（元新潟県立図書館長）着任

昭4・4・13 台北放送局と計り、以後毎週火曜日に図書館ニュースを放送する。

10・9 総督府図書館にて全国図書館協議会開催する。

昭7・1・11～17 第1回全島図書館週間を実施（以後毎年）。征台史料・良書・児童書など展示。

4・4 南総督巡視 7・14 中川総督巡視

- 昭9・5・1 函館大火罹災児童のため全島より読物募集、約26000冊を送付する。
- 昭10・8 開館二十周年記念式。十五年以上勤続者を表彰。
- 昭11・5 五ヵ年計画にて蔵書目録整備に着手。
- 昭12・12 皇軍慰問図書募集。約16000冊を陸海軍へ寄贈（以後毎年）。
- 昭13・12 皇軍慰問雑誌募集。約17000冊を寄贈（以後毎年）。
- 昭20頃 郊外の新店や南勢角に図書疎開を開始する。
- 5 台北空襲。蔵書4～5万冊焼失。
- 8 終戦。山中館長の尽力により疎開先の図書は博物館に集めらる。
- 昭37 中央図書館台湾分館新築。博物館より移管。現在にいたる。